

特別流動研究員から

—防災科研に思うこと—

特別流動研究員として防災科学技術研究所に勤務し、約1年が経過しました。特別流動研究員というのは、科学技術振興事業団が実施している制度で、民間企業等から募集した中堅層の研究者を国立試験研究機関が重点をおいて実施する研究プロジェクトに一定期間参加させ、その効率的な推進に貢献するというのが趣旨です。私は、平成9年度の募集で、防災科研の研究プロジェクト「革新的地震防災を目指した三次元震動破壊研究」に採用され、現在推進中の、世界最大の震動台を核とする「実大三次元震動破壊実験施設」に関わる研究に携わっています。

防災科研について思うことは、まず、研究設備や研究費に恵まれていることです。国内あるいは世界的にも最高水準の実験・観測設備をいくつも抱え、定員117名に対して約68億円の予算(平成10年度当初)というのは、設備整備や維持に予算の多くが割かれるとはいえず、恵まれた研究機関と言えるのではないのでしょうか。意外に思うのは、多くの研究室が2、3名の小編成であることです。総勢約80名の研究者が30近くの研究室に分かれ、地球科学・地震防災・自然災害に関する非常に広い領域をカバーしているわけで、全体として、各研究者がそれぞれ大掛かりな研究道具を整えつつ巨大な研究テーマに取り組んでいる、という印象です。



研究室が小編成であること、あるいは、広々とした自然環境の中にあることが関係しているのでしょうか、概して物静かなムードで研究が営まれているように感じます。私はこれまで民間企業の、どちらかというのにぎやかな「大部屋」でばかり仕事をしてきたものですから、この研究所で行われている研究規模の大きさと、それに反して静かな雰囲気との組み合わせに、何かしら感動のようなものさえ覚えます。ただ、この静かさが研究者間・研究室間のコミュニケーション不足につながらなければよいと思いますが。

最後に、実際に仕事をしていて民間企業の文化と大きく違うと感じる点に、物品購入や意思決定についての多段階的・慎重な手続きがあります。これには少々歯がゆさを感じるのですが、その仕組みをよく習得して、特別流動研究員の制度が有意義にはたらくよう、努力していきたいと思います。

(問い合わせ先：実大三次元震動破壊
実験施設計画推進室

特別流動研究員 ^{しば} 志波 ^{ゆきお} 由紀夫

